「インマヌエル」

23.12.03

崔楚英

おはようございます。
もう 12 月に入り、時間の流れがとても速いと感じます。今日はアドベント一週目の礼拝を神様にささげています。まず、み言葉をお読みいたします。

[イザヤ書 7:14-16]
14.それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。
15.この子は、悪を退けて善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。
16.それは、その子が悪を退けて善を選ぶことを知る前に、あなたが恐怖を抱いている二人の王の土地が見捨てられるからだ。

＜序論＞
「インマヌエル」というと多くのクリスチャンはすぐ「イエスキリスト」と思いだすのではないかと思います。私自身も「インマヌエル」は「イエスキリスト」のもう一つの名前だと教われたことがあります。ただ、「インマヌエル」という言葉は新約では、マタイの福音書 1 章で一回出てくる以外ないですね。イエス様の別の名前なのに一回しかでてこない、と疑問を抱いたこともあります。

今をいきる私たちには「インマヌエル」はイエスキリストだと成就された預言として、事実として歴史として記憶して、また記念しています。

預言とはそれが宣言された当時の意味を持つとともに、時間がたって、それが具体化されて最終的な形になっていくという特徴がります。イエスキリストが「インマヌエル」の最終的な形であるのであれば、最初の預言が宣言されているときはどのようなものでしょう？
今日は「インマヌエル」を旧約のところからみていきたいと思います。

預言はまず神様から与えられるものです。特に神様からたくさん与えられた時というのは、ユダ国が滅びにむかっていく時です。でしたので、預言の内容は警告し、民を叱り、そして最終的に希望について語ることが多いです。

このインマヌエルの預言も同じです。「インマヌエル」＝「イエスキリスト」という正解を知らない時代はどのようなものだったでしょうか。

イエス誕生の約 700 年前、アッシリアが世界の大国となったとき、隣接するアラムは北イスラエル王国と反アッシリア同盟を結び、ユダの王アハズにも同盟を呼びかけました。しかしユダ王国のアハズ

王はその呼びかけを断ります。そのために反アッシリア同盟軍（アラムと北イスラエル）が押し寄せて来るというのがこの部分の背景となります。
第二列王記 16 章と第二歴代誌第二 28 章とつながる箇所です。

＜part1＞
当時のユダの王はアハズ王でした。アハズ王はどんな人であったか、ユダの国はどんな状況だったでしょうか？

第二列王記 16 章からですと、彼は 20 歳に王になり、16 年間ユダの王としていました。二十歳に一つの国の王となった。若い王とも言えるでしょう。
先申し上げた二つの国、アラムと北イスラエルが同盟を結び攻撃してくるような状況の中でユダの民たちと、王はどのような心境だったでしょうか

[イザヤ書 7:2]
　ダビデの家に「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。

と当時の状況をイザヤ書は描写しています。このような事態は王も、民たちの心も林の木々が揺らぐように揺らいだと。まだ、攻撃してないです、ただ、同盟を結んだという知らせを聞いただけでも、すでに心配と、恐ろしさが彼らを襲ったことがわかります。

若い王で、強い軍事力も持っているわけではないですし、攻撃されたら、明らかに負ける。滅ぼされるという恐怖が民と王の心あったということは、客観的に見ても、この戦いは負けるに違いない、南ユダは弱いという事実を表しています。
この若いアハズ王はこのような状況に置かれてどのような選択をしていたかを見てみたいとおもいます

[列王記 第二 16:3,4]
3.イスラエルの王たちの道に歩み、主がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、忌み嫌うべき慣わしをまねて、自分の子どもに火の中を通らせることまでした。
4.彼は高き所、丘の上、青々と茂るあらゆる木の下でいけにえを献げ、犠牲を供えた。

一言で偶像崇拝をしたということです。そして異邦人のいけにえを捧げる真似をして、自分の息子まで火で燃やしてしまいます。偶像にささげたということです。
ですが状況はもっと悪化します。そして実際にもこの二つの国は攻撃に来ています。ユダで一日 20 万人が殺され、北イスラエルは南ユダから 20 万人の人を捕虜として捕まえてサマリアに連れていたと第二列王記に書かれてあります。

同盟を結んだという知らせを聞いただけで恐ろしく感じたものが事実となって、人が殺されたり、また捕虜として捕まれました。
このできことを前にして、神様はこの 7 章の預言をアハズ王に与えます。その内容としては、この二つの国によって滅ぼされることはないということです。ですが、恐怖に襲われたアハズ王はその預言を信じられないです。

＜part2＞
でしたので、神様はこの預言を確信させるためにしるしを求めなさいとアハズに言います。

神様が何かをなさる時、それに対して人がどうしても理解できず、信じられない時があります。ですので、しるしは大体の場合、人から神様に願うものです。「神様がなさろうとしていることが、信じられないとき、どうしても私は無理だとおもいますが、この小さい信仰のものを助けてしるしで確信できるように」と神様に求める場合が多いですね。
ギデオンもそうだったのですね。戦争に出かける前に、しるしをくださいと。羊毛を一晩置いて次の日に濡れているかどうかのしるしを求めた時があります。つまり、しるしはある事実が実際に起きる前に、それが必ず起きるという象徴的なものとして与えられます。

そして神様はご自身がなさろうとすることを、人に確信させるため、勇気づけるため、しるしを与えてくださるんです。
ですので、神様は今日の箇所でもアハズ王に「信じられないならしるしを求めなさい」と呼び掛けているのです。

[イザヤ書 7:11]
「あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」

今、しるしを求めるのであれば、どんなしるしでもそれを見せるということです。
不安や不信仰を抱いているアハズに「これで確信を得られるから、私があなたたちを守っていることを分かるから」とおっしゃるわけです。

ですが、アハズ王は続いての 12 節で

[イザヤ書 7:12]
アハズは言った。「私は求めません。主を試みません。」

と答えます、一見信仰がある言葉のようにも見えます。
「主を試みません」とアハズが発したことばは、イエス様がおっしゃっていた、「神様を試みてはなりません」という言葉の意味と違います。言い換えると、「もう見てください、こんな状況です。その二つの国はもうすでに攻撃してきています。20 万人の勇士つまり、敵と戦える人達が殺され、また奴隷に捕

まえた人たちもたくさんいます。私にはその力もないです。この状況で神様、あなたがなにかできるとは、私は考えられません。」という意味ですね。信仰がないのも当然、神様に期待できず、預言者たちに言われた言葉も信じられないです。神様がどのようにこの状況を解決するかの想像もつかないわけです。

このように信仰もなく、期待もしないアハズ、ダビデの家に向けてあなたたちが求めないなら。
「主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる」とおっしゃるのです「自ら」です。
「あなたたちが主の働きを求めたものではない、願ってもない、期待もしてないが、主が、自ら与えるしるしということです。」

そのしるしが皆さんも良くご存じの「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」です。そして続ける節「この子は、悪を退けて善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。それは、その子が悪を退けて善を選ぶことを知る前に、あなたが恐怖を抱いている二人の王の土地が見捨てられるからだ。」 とあります。

その時代にこの「インマヌエル」とはイエス様を指していると考えられなかったでしょう。この言葉からすると、ある子どもが生まれるが、そのこどもが悪を退けて善を選ぶことを知る前に、つまり、近いうちに二つの国が滅びる。ということです。

このこどもは「だれか？」また「処女からとは？」の疑問が当時の議論点ではなく、ある子どもが「インマヌエル」のしるしとして生まれる。つまり、神様が私たちと共におられるしるしとして生まれる。
この子の生まれを基準にして数年後二つの国が滅びるというのがこの預言が最初の意図です。

ですので、この予言は、神様が自らしるしを与え、数年後神様がそれを成就した。ということです。ダビデの家が求めてもなく、信じてもないが、神様が自ら願い、ご自分の意志をもってユダを救い、敵を退けた！が「インマヌエル」神が我々と共におられる、という言葉の意図です。

実際に数年後まずアラムが、次にイスラエルが滅びます。
このユダを二つの国から守る、救うしるしとして使われていた「インマヌエル」という言葉は、人が願ってなくても、神様が主導的に働くという証明であります。

新約の時代になって、この「インマヌエル」という言葉はもっと具体化され明確になります。

[マタイの福音書 1:21-23]
21.マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」
22.このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。
23. 「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。

旧約とつなげて考えると、イエスこのすくい主の誕生は、神様が私たちと共におられるということのしるしであり、21節のご自分の民をその罪から救うという神様の強い決心でもあります。

その変わらない、揺るがない神様の決心があるゆえに、当時を生きた人たちがイエスキリストが救い主であると信じなくても、期待しなかったとしても、その計画を実現していたのです。
神様は人と共にいて、「自分の民を救う」という神様の決心がイエスキリストを通して事実となって、歴史となって、確実な証拠となりました。

＜part3＞
神様が主導的に目的をもってものごとを進めていくということです。それらは歴史を見てもよくわかることです。ですがなぜ、アハズ王はそのしるしを期待も信じることもしなかったでしょうか？

結論からお話しますと、神様の働きかた、その目標に至る仕方は、人が物事を認識して理解して、願っているものとギャップがあるからです。

アハズ王を例といたしますと、先も申し上げたように 20 歳に王となった若い王で、責任も感じていたでしょう。そして攻めて来る二つの国からの不安もあったでしょう。
その中で「我々の国にはこのようなものがあったら安心するのに、困らないのに」という願いがあったはずです。具体的にどのようなものであるかはわからないです。国を守るための軍事力かもしれないですし、自分が頼れる確実に安全な何かのものかもしれないです。

ですが、明らかに神様はそれを与えてくれなかったです。与えられたのはしるし、「こどもがうまれる」。。。
「自分が理解できる解決策だ」と思えるものを神様は与えてくださらないので、ほかのものに頼ります。

自分の願いが間違えたと考えるより、その願いを叶えてくれそうな存在に行きます。偶像に自分の子供までささげでも、手に入れたい、それくらい切にほしいものです。そのものが、必ずしも、悪い欲望のためのものとは言い切れないです。ユダの国を守るための軍事力かもしれないし、国を守るための目に見える、頼れる何かの力かもしれないですし、今すぐ民たちに与えたい平安かもしれないです。

アハズはアッシリアに助けを求めにいきます。そして、それがうまくいくように見えました。でしたので、アハズ王は、残念ながら、神様への礼拝の仕方も、主の宮もアッシリア王のために改造までします。いけにえを神様にささげているものの、アッシリア王に合わせられたささげ方をします。アッシリア王に良く見せるための礼拝をしているのです。ですがアハズが頼りにしたアッシリア王国は後日ユダに大きな危機をもたらす存在となります。

神様がアハズ王に教えたかったのは、私が共にするから大丈夫だということです。しるしを与えながらも「私が働いている」と知らせているのです。私の働き方は人間の働き方と違うということを示し、そして悟ってほしかったのではないでしょうか。

両方ともユダの国の守りについてのものですが、アハズ王はアッシリアの軍事力に頼ってそれを叶えたかったが、神様はアハズが神様に頼ることを願っていました。神様に頼るということは、神様の働き方を心から認めて従うことですね。

この神様の働き方と人の願いの間のギャップに対して、神様は人と共にいながら、人を神様の働き方に頼るように引っ張っていくのです。アハズ王は最後までそれに気づいてなかったでしょう。

＜part4＞
私たちクリスチャンはどうでしょうか？私たちは神様に祈ることを通して、何かを求めます。信仰の初期は祈りが答えられたことがうれしくて、またそのことが「神様が本当にいらっしゃる！」という確信につながる時があります。祈りって効果がある！と思えるときですね。感謝なことです。

ある韓国のクリスチャン新聞に「答えられなかった祈りがもっと多い」というタイトルで記事が書かれたのを見たことあります。本当によくよく振り返ってみると、答えられた祈りより、答えられなかった祈りの方が多いです。

人間は自分が分かる範囲で、考えの中で理想的なものを選んでいきます。そしてそれが、最善なものだと思って願って祈っていきます。今、近いうちに、できるだけ早く、与えられることを願います。
ですが、神様はご自身が願う目標まで、ご自身が計画した良いことまで必ず導く方です。

例え人がそれを願ってなくても、期待してなくても、その計画を必ず成就するお方です。ですので、時には私たちの祈りが答えられないのです。

その時には悲しみ、なぜ今ではないですか！と神様に向かって怒ったりもしますが、その中でも、私たちは神様が計画した道をとおっているのです。後々になって、時間がたってからやっと「その時の祈りは答えられなくてよかった」と認めるようになるのです。

答えられなかった祈り一つ一つが実は「インマヌエル」神様が私たちとともにおられて、神様が願う一番良いところへと導いている証拠でもあります。
私たちが願う通りに行く道ではなく、神様自らご自身が私たち一人ひとりになさろうとする計画に向けて一所懸命私たちを諦めず、引っ張っている証拠です。神様の働き方を見せているのです。

これらの答えられてなかった祈りだけど、それでよかったと思えることの積み重ねがあり、また、答え

られたことの積み重ねもあり。最後にすべてが良かったと認めることになりますね。

「御心であれば」「神様の御心の通りに」と心から願い、祈ることができるのです。このような祈りが「私は理解できないが、神様の働き方を認めます」という告白ではないでしょうか？

＜まとめ＞
神様が「インマヌエル」とともにしてくださったことに感謝し、クリスマスの季節を迎えてイエスキリストの生まれは、神様が自分の民を救うための意志であって、どんなものも妨げることができない神様の計画であって働きであります。

「インマヌエル」の預言の成就を言いながら始まったマタイの福音書の最後はこのような言葉で終わります。
［マタイの福音書 28:20］
わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。

と世の終わりまでともにいてくださると、イエス様がおしゃっています。
つまり世の終わりの時まで、慰め、癒すだけではなく、時には叱り、時には沈黙しながらも、ご自分の御手に私たちを握っておられ、ご自分が計画したその目標まで必ず引っ張ていきます。という約束であり、イエス様の固い意志の表現です。

その全能なる神様の御手に握られていることに感謝し、喜びをもって迎えるクリスマスになっていくことを願います。

お祈りいたします。